建築計画部門 ―パネルディスカッション（1）

文化財になった住宅団地の保存と活用
―UR 旧赤羽台団地の経験を通して「現地」で考える

［資料あり］

9 月 12 日（火）9:00～12:30　オンライン 第 H 室

司会　　栢木まどか（東京理科大学）
副司会　熊谷亮平（東京理科大学）
記録　　志岐祐一（日東設計事務所）

1.主旨説明　松村秀一（早稲田大学）
2.UR 旧赤羽台団地プロジェクト紹介　UR 都市機構
3.報告
❶旧赤羽台団地保存の歴史的な意味
　　海老澤模奈人（東京工芸大学）
❷保存住棟群が活用できるということ
　　大月敏雄（東京大学）
❸スターハウス・コンペから見えてくる活用可能性
　　田島則行（千葉工業大学）
❹団地大学構想について
　　宮崎晃吉（HAGISO）
4.討論
5.まとめ 井本佐保里（日本大学）

2018 年 7 月、本会から「UR 都市機構赤羽台団地の既存住棟（41、42、43、44 号棟）の保存活用に関する要望書」が UR 都市機構に対して発出された。このことも手伝って、2019 年には、UR 旧赤羽台団地既存住棟が登録有形文化財（建造物）になった。日本住宅公団の集合住宅が文化財となるのは初めてのことで、日本における集合住宅計画史にとっては実に画期的なことであった。

ここで重要なことは、複数棟による団地内の特徴的な景観形成が評価され、公団標準設計として採用された住棟タイプの一つとして重要なスターハウス（42～44 号棟）と同時に、公団標準設計の進化型として東京支所独自に開発された 41 号棟を含めた形で文化財となっていることである。その活用方策として、それまで UR の施設（八王子）に存在していた

「集合住宅歴史館」の展示内容をバージョンアップして、この中庭に新築の展示施設を設けることとなった。

これを受け UR と日本建築学会の間で連携協定が取り結ばれ、「旧赤羽台団地における情報発信施設の整備及び保存住棟等の活用に関する調査研究」を実施するために、建築計画委員会の中に「UR 集合住宅団地・保存活用小委員会」（委員長：松村秀一）が立ち上げられた。この委員会には、建築設計、リノベーション、建築運営を専門とする委員を中心とした「企画ワーキンググループ」（主査：田島則行）と、建築史と建築計画を専門とする委員を中心とした「歴史・文化ワーキンググループ」（主査：大月敏雄）が設置された。

本パネルディスカッションでは、上記の取組みの経緯と成果を生中継で共有し、この研究活動の今後の課題と可能性についての議論を、異分野横断型の専門家集団によって、さらに深めていくことを目指している。